

テーマ：あなたという“役”を面接でどう紹介するか

面接対話スクリプト例①：自己紹介の場面（自分らしさ重視）

面接官（企業側）：「では、簡単に自己紹介をお願いします」

応募者（あなた）：

「はい、〇〇大学〇〇学部の△△と申します。私は、よく“好奇心のかたまり”と言われるタイプで、知らないことや新しい仕組みに出会うと、自然と調べて深掘りするクセがあります。

大学では、ゼミ研究だけでなく、街づくりイベントのボランティアにも関わりました。役割は違えど、どちらも“人とつながりながら新しいことに挑む”という点では共通していました。御社の募集職種でも、まさにその姿勢を活かせるのではと考えて応募しました。」

ポイント解説：

「自分を役にキャスティングする」ように語ることで、“らしさ”が自然と伝わります。演技ではなく、“自分という役の魅力”を表現する姿勢が大切です。

面接対話スクリプト例②：「なぜうちの会社？」の問い（オーディション視点で応答）

面接官：「数ある企業の中で、なぜ弊社を選んだのですか？」

応募者：

「私は“表現と発信”の分野に強く関心があります。御社の広報職を拝見したとき、まさに自分が“演じる”のではなく“自分の得意な形で貢献できる場”だと感じました。

実は、他にも選考を受けている企業がありましたが、そちらでは『自分の個性が少し浮いてしまうかもしれない』と感じていて。御社の採用ページや社員の雰囲気から、“私という役”がここで自然に生きるかもしれないと直感的に思いました。」

ポイント解説：

「相手に合わせた演技」ではなく、「舞台との相性」で語ることで、過剰な迎合感が消え、“相互選考”という健全な印象を与えられます。

面接対話スクリプト例③：「失敗経験」の問い（オーディションでの“落選”にどう向き合うか）

面接官：「過去の失敗経験について教えてください」

応募者：

「大学1年のとき、ミスコンの裏方スタッフとして参加した際、SNS運営での連携不足が原因で、炎上寸前の事態を招いてしまいました。

当時の私は、“一人でなんとかできる”という思い込みが強すぎて、周囲との調整を後回しにしていたんです。その結果、他の部署の予定とかみ合わず、重要な発信内容に誤解が生まれました。

今では、“準備と連携のオーディション”に私は一度落ちたんだと思っています。ですがその体験のおかげで、現在はどんなに小さな共有でも“通す”ことを徹底しています。」

ポイント解説：

「過去の落選」を“役に合わなかった”経験として語り、それを“次の舞台への糧”として転換している点が重要です。